

# 夢を盗む女

芳野昌之  
YOSHINO MASAYUKI



芳野昌之

夢を盗む女

早川書房

夢を盗む女

一九九一年九月二十日 印刷  
一九九一年九月三十日 発行

著者 芳野昌之<sup>よしのまさゆき</sup>

発行者 早川 浩

発行所 饅頭早川書房

郵便番号 一〇一

東京都千代田区神田多町三ノ二  
電話 東京(三三)三二二(大代表)  
振替番号 東京六〇四七九番

乱丁・落丁本はお取替いたします  
定価はカバーに表示しております

Printed and bound in Japan

検印廃止

印刷・信毎書籍印刷株式会社 製本・大口製本印刷株式会社

ISBN4-15-203489-0 C0093

夢を盗む女



## 目次

プロローグ \* 5

プロローグ \* \* 6

第一章 坂口の場合 9

第二章 矢之口アパートで 38

第三章 祐子の場合 47

第四章 怯える記憶 64

第五章 随筆「夜の虹」 81

第六章 「金の卵」の客 101

第七章 「クルーザーズ」の女 113

第八章 加島祐子の行方 131

第九章 イベント前日 143

第十章 消えた二人 156

第十一章 事件の背景 184

第十二章 ふたたび烏谷へ 194

第十三章 「金の卵」の女 221

第十四章 夜の山峡 252

エピローグ 262

## プロローグ \*

交差点の手前は急カーブを描いている上に、なだらかな坂道になっている。それが盲点になって、よく事故が起きる。最近ガードレールが数カ所に取りつけられ、歩行者が横断できないようになった。

しかし、このカーブはなぜか歩行者に横断したいという気持ちを感じさせる要素を持っているらしいのだ。信号のある交差点までの坂道が歩行者の心理に影響しているのかも知れない。車の流れを見ずして、一気に駆け抜ける者があとを絶たない。

その夜は雨が降っていた。土曜日で車の姿はない。駆け抜けるにはおあつらえ向きの条件だった。雨傘を傾けた女の人影が、ガードレールの隙間をすり抜けた。買収物の荷物が動作を鈍くしているようだ。不意にカーブを曲がってオートバイが姿を見せた。雨の音と雨傘が女の判断を狂わせた。まるで磁石に吸い寄せられるように、人影は直進してくるオートバイの前に飛び出したのだ。

女はもんどり打って路上に転がり、身動きしなくなった。一瞬、オートバイは速度を緩めて停まり、様子をうかがっていたが、直ぐに轟音を残し、スピードを上げて駆け去った。人通りもなく、車の気配もない魔のような一瞬だった。



ジョギングシューズを渡され、車のなかで履き換えたときには、まだ軽いハイキングのつもりで冗談をいっていた。ある程度の道のりとは思っていたが、こんなに草深い山径を歩くとは考えていなかった。晩秋の陽射しは山の稜線に近づき、黄味を帯びた落葉樹の梢をあかあかと照らしている。小さな茶色い鳥が礫のようになんども空を掠めた。尾の長い鳥が一声奇妙に喉をふるわせて、赤い落日に向かって狂ったように真っしぐらに飛んでいく。

湿気をふくんだ落ち葉がゴム底の靴の裏で、溜め息のような微かな音を立てる。葉脈の浮き出した黒く腐った葉は、数カ月前のものだろう。山肌は季節毎に、肌着のように落ち葉を重ね着するのだ。足元の奇妙な溜め息に氣をとられているうちに、彼女は自分が一人きりになったことに気づいた。足音は聞こえない。あわてて追いつこうと急ぎ足になった。山径を歩き慣れないので、柔らかな落ち葉の層に足をとられて、倒れそうになる。

岩の陰を回り込んだ場所で、彼女は異様なものに出くわした。落ち葉の層がはぎとられ、黒々とした深い穴が口を開けている。赤みを帯びた土が穴の周りにうずたかく盛り上げられているのだ。掘り出された粘土質の土であった。

予期しなかったものを見つけた驚きがあった。彼女は怖々なかをのぞいた。何も潜んでいる形跡がな

い。そのことが彼女を不安にした。いったい何があると思ったのだろう。背後で落ち葉が溜め息をつく、密やかな心配がした。人が近寄ってくる音だ。彼女は慄然として振り向こうとしたとき、後頭部に激しい痛みを感じた。二度、三度と衝撃が加えられる。細い紐が首に巻きつき、ぐいぐいと締めつける。眼前に赤い落日が迫り出し、急に黒く引き歪んだ。彼女のこめかみは鬱血で破裂しそうに膨れ上がる。

なぜ、なぜ、こんな仕打ちを……と痺れた思考が死力をしぼって、空しいあがきを続ける。どこまでも墜落して行く黒い闇が、彼女の最期の記憶になった。

白い目を剥き、苦悶の泡が唇から流れ落ちる。首をくの字に折って彼女は崩れ落ちた。着ていたブラウスや下着が荒々しく剥ぎ取られ、新しいジョギングシューズが脱がされた。裸の軀は穴の底に投げ落とされた。湿気を吸った赤土が地響きを立てて次々に落とされ、みるみるうちにその姿を覆い尽くした。



## 第一章 坂口の場合

文教関係の官僚をめぐる汚職が発覚したのは、梅雨が始まる鬱陶しい時期だった。

汚職が大臣クラスにまで発展し、さらに内閣の中枢にまでおよびそうな雲行きになった。

東西タイムズの世論調査室に勤務している松方光子<sup>まつかたみづこ</sup>は、これでことしの夏休みも駄目になったと思った。汚職捜査が日を追って上層部に波及していくのを見ていると、国会の解散もそう遠くないだろう。

東西タイムズは春と秋に定期世論調査を実施している。その結果を特集記事にして特報する。

東西タイムズの世論調査は、他紙の調査とは少し違った特色を持っていた。世論調査は客観的なデータとして信頼できるものでなくてはならない。学術的な資料として通用するものでなくてはならない。だから調査対象は厳密な方法で抽出し、毎年同じ質問を重ねて、世論の動向をさぐる定点観測の意義を持たせている。

しかし、定点観測に加えて、その時々トピックスも補足調査の項目に加えていた。「地価高騰の劇的対策について」とか「若者はなぜ宗教に走るのか」とか「中流意識とグルメ感覚」とか、社会面の話題作りのセンスで、かなり大胆な質問項目を作っている。この集計結果を有識者に見せて、切れ味のよい大胆なコメントを添えて紙上で紹介している。これが本来の定点観測的な世論調査よりも、人気を呼んでいるのだ。紙面での扱いも回を重ねるごとに派手になっていく。

松方光子はこの風俗的なジャンルの世論調査の担当として、二年前に社会部記者から世論調査室勤務になった。基礎資料作りには社会部との協同作業が多いし、社会部出の専従がいた方がよい。そういう事情で光子は世論調査室の調査主任に推された。

光子は時間をかけて世論の動向をさぐるという仕事がりあい氣にいつている。入社して五年近く、警察回りや官庁回りを手がけた。遊軍記者としても中堅株になっていた。

仕事に精出していたと我ながら思う。夜更けまで取材先で張番を続けたこともある。女性のハンデを氣力で克服してきたところがある。この年齢になるまで、これといった恋愛もなかったのは、そういう頑張りが異性の目に凄まじく映ったせいかもしれない、と光子は時々思うのだ。

「それもある」

と友人たちはいう。

「第一線の職場で現役を張り続けるのは、男性でも大変なことよ。好きでなくてはやれないわね」

同期入社 of 女性は五人いたが、光子を除く四人は結婚した。職場も比較的時間の余裕のある部署にいる。一人は専業主婦になった。入社当時は五人とも愛煙家だったが、今では煙草を吸うのは光子だけだ。光子はますますヘビー・スモーカーになっている。生活の不満がこういうところに捌け口を求めているのだろうか。

上役から世論調査室勤務を打診されたとき、これ以上今の勤務を続けるのは辛いという気持ちだが、光子の心の底に動いたことは確かだ。潮時かもしれないと思った。いずれは他の部署に異動することになるだろう。日々のニュースを追う仕事は、活氣があつておもしろい。結構楽しいものだった。しかし、じつくりと腰を落ち着けてデータを集める仕事も好きだった。それなら世論調査はやりがいがあるような氣がする。光子の同期の者はまだ役職に縁がなかった。主任という待遇は上役の氣遣いを示すものもあつた。

郷里の母親はこの異動を喜んだ。母親は四十代のころに離婚して、光子ら二人の子育てをやり遂げた。当時はまだ数の少なかった服飾デザイナーとしてのキャリアを生かして、自活の道を切り開いたのだ。苦勞性の母親は、

「真面目に結婚に取り組まなくては、あつという間に三十の声を聞くようになるからね」と真顔でいうのだった。休暇で帰郷するたびに、母親は見合写真を用意していた。しかし、光子が乗り気になる縁はなかった。

三歳違う妹が結婚したときはさすがにこたえた。電話で直接妹から知らされたあと、光子は鏡に顔を写して、目尻の小皺を指先でこすったものだ。

昔から母親は光子の顔を見ながら「役者になれば良い」といった。顔立ちが大きいのだ。目も口も大作りである。眉も吊り気味だ。

「顔が大きいだけで、役者になんかなれっこないわよ」

中学生になってから、光子は母親に反論した。

「女優は才能ですからね」

「お前は目鼻立ちがいいのに、可愛げがないよ」と母親はいったものだ。「憎まれ口が多いから、妹に先を越されるよ」

母親のいう通りになってしまったが、その後は母親も諦めたのか、縁談のことは口にしなくなった。光子は二十九歳だ。

「花のキャリア・ウーマンよ」と自分ではへらず口をたたくが、毎年迫力が薄れてくるような気がする。「一発大逆転ということもあるわよ」

と妹がへんな慰めかたをする。妹は二人の子持ちになっていた。

同期入社の婦人記者同士で誘いあわせて、青山や六本木で夕食を食べることもあるが、そういうとき

は自然に若者たちの店を敬遠している。光子はどちらかというと、一杯飲屋の方が性にあう。

「中年オヤジみたいな趣味ねえ」と冷やかす者がいる。

「所帯やつれたみたいないことをいわないで」

と光子は言い返すのだが、虚しい思いがしなくてもない。

「あんたは母親の愛情しか知らないから、父親コンプレックスがあるのだと思う」と友人がいう。

「それどういふこと？」

「同年輩の若い男に魅力を感じないのよ。ヤワに見えてしまうのよ。年齢の離れた妻子持ちの中年男に興味を持つようになる。気をつけた方がいいわよ」

「妻子持ちなんか魅力あるなあ」

「またまた」

光子は世論調査の仕事には満足していた。最初案じていたような無味乾燥なところはない。現実のニュースと敏感に結びついている。とくに国会解散、総選挙という事態になれば、臨時の仕事で忙しくなる。立候補予定者へのアンケート調査だとか、有権者の支持政党調査、選挙意識調査を実施しなくてはならない。

質問項目の作成や実施の具体的方法を練る段階で、対外折衝に忙殺される。そういう時期になると、毎晩タクシー送りになって、帰途につくのが午前零時か一時ごろである。都下にある公団アパートに帰りつくのは午前二時頃だ。シャワーを浴びて、ダイニング・キッチンで水割を飲んでから、軽い夜食をとる。

直ぐに眠るわけにいかないので、たいていは翻訳物のミステリを読んで過ごす。ルース・レンデルやP・D・ジェイムズらイギリスの女流物である。寝床にはいるのは午前三時頃だ。

新聞社の社内にはふしぎなふんいきがあつて、大事件が起きると、編集局長から一記者にいたるまで

活気を帯びるのだ。アルバイトの給仕にもその余波は及んで、頬を上気させて編集局内を右往左往する。幕内弁当や缶ジュースが食事時に差し入れされ、一段と熱気がたかまる。

世論調査室は普段は事件と直接の関係がないが、臨時の調査物がはいると、スタッフは活気を帯びるのだ。仕事の性格上、これが二カ月ぐらい続く。

光子が資料調査部の坂口隆吉から電話を受けたのは、臨時の世論調査の仕事がはいりそうな、ちょうどそんなときのことであった。

午後九時過ぎに仕事にひとくぎりつけて、煙草をくゆらせていると、卓上の電話が鳴った。

「松方さんをお願いします」

光子は声から直ぐに相手が坂口であることが判った。坂口は社会部のかなり先輩で、光子が入社したての頃に三カ月ほど、都庁回りの要領を教わったことがある。当時坂口は社会部の最古参で、都庁詰めの遊軍記者であった。その後まもなく資料調査部に移り、取材の第一線から退いたのだが、どこことなく光子と気の合うところがあって、ときどき酒に誘ってくる間柄だった。光子も坂口から声がかかると、気軽に応じた。しかし、二年前に坂口の妻が交通事故で亡くなって以来、坂口も以前ほどには誘わなくなり、間遠になっていたのだ。職場でも口数が寡なくなったという噂だった。子供のない坂口は独り暮らしを続けているらしく、それも精神状態に影響があるらしい。

「松方です。お久しぶり」

光子は挨拶しながら、相手の声にアルコール気はいっていないことに気づいた。以前、光子に電話してくるときは、たいいて一杯機嫌のときが多かった。酒の誘いでもなさそうだ。もし一杯やろうという話なら、もう少し早い時間にかけてきたはずである。

「松方、じつは頼みごとなのだ」

と妙に硬い響きで、普段のさつくばらん坂口らしくない。



「姪がね、取り乱してわたしの自宅に電話してきて、彼女の弟が飛行機事故にあっただけだ」というのだ」

「えッ、国内便ですか」

光子は受話器を耳に当てたまま、中腰になってテレビのスイッチをいれた。

「国際便だ。チューリッヒ空港で着陸態勢にはいったまま、墜落したらしい」

「甥の方は何という名ですか」

「加島啓一だ。加えるに小島の島。それから拝啓の啓に、数字の一」

「事故の時間は判りますか」

「一時間ぐらい前らしい。航空会社から緊急連絡があつたそうだ。わたしのところへ直ぐに電話してきてた。火災を起こしているらしいが、詳しいことは判らない。パンヨーロッパ航空の七八七便だといっている」

「社会部のデスクに行つて聞いてみます」

光子は頬に血が上がつていた。第一線の取材から退いていても、こういうときは反射的に気負いたつてしまう。光子はテレビ画面を見ながら、立ち上がつていた。画面では時代劇をやっている。チャンネルを切り替えてみたが、どの局の番組にもまだ臨時ニュースのテロップは流されていないようだった。

「頼むよ。直接社会部に電話しようかと思ったが、忙しいだろうと考え直した。それで前がまだ会社で仕事をしているのではと思ったのだ。詳しいことが判つたら教えて欲しい」

「判りました。自宅ですね」

「そうだ。頼むよ」

社会部では先輩は同輩や後輩の記者を呼び捨てにする。親愛の気持ちで呼ぶことが多いが、序列意識の横柄さからわざとそういう者もいる。坂口の場合はごく自然な親しみから、光子のことを「お前」と